二〇一一年一一月一六日（参加者一五名）

竹の影現れては消ゆる白障子　うつぎ
利酒に盃を重ねし吟行子　〃
利酒の胃の腑に落ちて合点す　〃
利酒す蔵の奥より杜氏歌　〃
吟行を忘れ新酒の香に酔へり　〃
背丈越す櫂を自在に寒造　菜々
舌の上にまろびまろばせ新走り　〃
利き酒に頬をそめたる木の葉髪　〃
温かや白壁つづく灘五郷　〃
踏み減りし蔵の床板寒造　〃
家苞は新酒にあらず酒の粕　ひかり
長屋門懸崖菊を侍らしむ　〃
小燈しの手元を照らす寒造　〃
明り窓高きにほのと寒造　百合
六甲の風恃みとす寒造　〃
下戸上戸蘊蓄語り酒を利く　〃
もみじばの秀をしをりとす句帳かな　せいじ
酒粕は妻へのみやげ新酒利く　〃
七五三一張羅にスニーカー　〃
津の国の水誇りとす寒造　よし子
大桶の箍ゆるみなし寒造　〃
序破急の風に嬲られ木の葉髪　ぽんこ
箒目を守る翁や菊花展　〃
酒蔵を展示室とす冬舘　かれん
大桶の底まで見せて冬うらら　〃
箱膳の並ぶ一間や白障子　こすもす
寒造丹波杜氏の男振り　つくし
冬晴れに商標の鶴羽ばたけり　小袖
蔵人のぞうりに格差身にぞ入む　有香
日差すときゆらぐ竹影白障子　満天
つくばいに侍りさざんか咲き初むる　はく子
寒造男柱の太々と　〃
温かや暖気樽並ぶ資料館　〃

定例句会みのる選

二〇一一年一一月一六日（参加者一五名）